カンボンの歴史的形成プロセスとその特質

インドネシア都市の生活空間に関する研究(1)

THE KAMPUNG TYPE OF SETTLEMENT AND THE PROCESS
OF ITS FORMATION

Study on urban space for living in Indonesian cities No.1

布野 修司*

Shuji FUNO

The kampung type of settlement is characteristics of town and city life in Indonesia, especially everywhere in Jawa. Kampung is something of a reinterpretation of the village pattern in terms of the denser, more heterogeneous, less organically integrated urban environment.

The kampung is often described as slums because of its poor physical conditions, but the kampung world is apart far from slums in the Western cities. Kampung is identifiable primarily by their age, location and economic wellbeing. Individual kampung seems to be microcosmos of great variety. This paper aims to clarify the concept and the nature of kampung type of settlement and the process of its growth historically.

Keywords : *kampung, desa, Surabaya, urbanaization process, urban living space, village pattern*

カンボン, デサ, スラバヤ, 都市化過程, 都市居住環境, 村落形態

1. 序

カンボン (kampung)^{注1)}とは、インドネシア語でムラのことである。今日、行政単位である村はデサ (desa) と呼ばれるが、もう少し一般的に使われるのがカンボンである。ムラ、部落、集落を一般的に意味する。カンボンと言えば、田舎、農村というニュアンスがある。カンボンガン (kampungan) とは田舎者のことである。一方、都市の居住地も同じようにカンボンと呼ばれる。都市でも農村でもカンボンと呼ばれる居住地の概念は、インドネシアに固有のものと言える。

現代のインドネシア都市のカンボンは生活空間として極めて興味深い特質をもっている^{文1)}。例えば、カンボンは地区によって極めて多様で特性を異にする。そして、それぞれのカンボンもまた民族や収入階層を異にし、多様な人々からなる複合社会を形成する。また、カンボンの空間は、日常生活のほとんどがその内部で完結しうる、極めて自律性の高い空間でもある。カンボンのなかでは様々な日常生活用品が生産されている。消費機能のみならず生産機能も持っている。さらに、相互扶助のシステムがしっかりと根付いている。伝統的に培われた、ゴトン・ロヨン (gotong royong 相互扶助)^{注2), 文2)}、そしてル

クン (rukun 和合)^{注3)}は、ジャワ人最高の価値意識とされるのであるが、現在でも、様々な形で、カンボンの生活を支えている。

一方、以上のような特性をもつカンボンのコミュニティーをベースとして、60年代末より、KIP (カンボン・インブループメント・プログラム) と呼ばれる居住環境改善の試みが行われてきた。そのKIPは、居住者参加型の居住環境整備の手法としてグローバルにも注目されてきた^{文3)}。

本稿は、居住地のモデルとして興味深いカンボンの生活空間の特性を明らかにする調査研究の一環として、また、居住環境整備の手法として興味深いKIPの評価を行う前提として、カンボンという居住地の概念を歴史的に考察し、その形成プロセスを明らかにする。

伝統社会についてのオランダ慣習法学や構造人類学の膨大な蓄積に比して、インドネシアの都市についての研究は極めて少ない^{注4)}。本稿は、カンボンの形成という限定された視点からではあるが、インドネシア都市史の一断面を明らかにする意義をも有している。

* 京都大学 助教授

Assoc. Prof., Kyoto Univ.

2. デサとカンボン

今日、インドネシアの行政単位は、農村部では、デサであり、都市部では、クルラハン (kelurahan) である。まず、デサとクルラハン (カルラハン) をしてカンボンの関係について、その語源を明らかにしたい。

インドネシアにおいて、各民族、各地域の伝統的な村落は様々な呼び方をされてきた。ミナンカバウのヌガリ (nagari) — コタ (kota), バタック・トバのビウス (bius) — フタ (huta), ニアスのバヌア (banua), マンタウェイのラゲイ (laggai), フローレスのベオ (beo), アチェのガンボン (gampong), ブギスのワヌア (wanua), バリのバンジャール (banjar) などである。デサというのは、もともとは、ジャワの村落を指す言葉である。デサという言葉はヒンドゥー語に由来し、サンスクリットで「地方」を意味する désa を語源として、マタラム王朝 (8～10 世紀) の頃ジャワに導入されたという。それに対して、スンダ (西ジャワ) では、カルラハンが村落の呼称として用いられていた。そして、カンボンというのはカルラハンを構成する単位であった²⁴⁾。

インドネシアの村落は以上のように極めて多様である。C. V. フォレンホーフェン²⁵⁾は、インドネシアの全域を 19 の法域に分けている (図—1)。アチェ法域 (1 図—1 の番号 以下同じ)、バタック法域 (2)、ミナンカバウ法域 (3)、南スマトラ法域 (4)、マレー法域 (5)、カリマンタン法域 (7)、バリ・ロンボク法域 (16) およびジャワ島の三つの法域が主なものである。ジャワの三法域とは、すなわち、西部ジャワ (19)、中東部ジャワ (17) および王侯領 (18) の三つである。一般的にバタヴィア人を区別して、四種族と三慣習法圏でジャワをとらえることはこれまでの前提となってきた。

その前提をもとに、デサとカルラハンの違いについて、もう少しみてみたい。C. V. フォレンホーフェンは、ジャワの村落を「旧法の村落」(ouderwetsche desa) と「新法の村落」(niewerwetscher desa) に分けるのであるが、「旧法の村落」というのが慣習法に基づく村落である。C.

V. フォレンホーフェンの分類するジャワ島の四つの村落のうち、スンダとジャワの違いは以下のようである²⁵⁾。

スンダの村落：ジャワの村落のように領域的な地域を囲い込んでいない。また、マドゥラの村落のように飛地的な田畑から構成されていない。村落はカルラハンと呼ばれるが、それは一つ以上のルンボール (lemboer : 区) すなわちカンボンからなる。そして、このカンボンは、それぞれ部落、すなわちババカン (babakan, 後にアンピハン, ampihan) によって構成される。そして、それぞれのカンボンおよびババカンは固有の名称をもつ。ジャワのデサのように自治領域をもたない。

ジャワの村落：連続する生け垣と木陰の囲い込みのなかに村落が形成され、田畑のなかに島のように散在する。単一の村落、すなわちデサ (desa) あるいはひとつの母村 (クラジャン, kradjan) が、ドゥクー (doekoeh), プドコハン (pedoekoehan), チャンテラン (tjantelan) と呼ばれる村落 (分村) を付属させている。

以上のような、慣習法に基づく村落の呼称から、デサ、カルラハン、カンボンといった言葉の語源が明らかになる。すなわちカンボンというのはスンダ地域において、その連合体であるカルラハンを構成する単位として用いられていた言葉である。それに対して、より自律性の高い単位として用いられていたのがデサである。またデサを構成するのがドゥクーである。したがって、デサとカンボンを同じものとみなすことはできない。スンダとジャワでは村落のあり方が異なっており、デサとドゥクーの関係とカルラハンとカンボンあるいはババカンの関係は同じではないのである。

慣習法に基づくデサと現在のデサも決して同じではない。「新法の村落」とは、原住民自治体条例 (Inlandsche Gemeente Ordonantie, 1906 年) 下の村落のことである。1830 年の強制栽培制度の導入、1870 年の農地法の制定を中心とした、植民地期における村落行政にかかわる諸立法によって分割、統合された村落が「新法の村落」である²⁶⁾。共同体的な要素を濃厚に残してきたジャワのデサは、植民地化の過程において大きな変容を経験するのである。

原住民自治体条例が行政単位の名称として採用したのは、デサという呼称であった。オランダ植民地期において、デサが原住民自治体を意味する公用語となるのである。ジャワ、スンダ、マドゥラの慣習法に基づく村落組織の最大公約数が求められる。その際、スンダのカルラハンをもとにした行政システムは採用されないのである。

デサをどうとらえるかをめぐっては、これまで膨大な論考がある²⁶⁾。諸論考は、

図—1 インドネシアの 19 慣習法圏 C. van Vollenhoven による

デサと呼ばれてきたジャワの村落が植民地地方行政へ組み込まれていく過程を大きな主題にしている^{註7)}。この条例に基づくデサは、しかし、それ以前のデサとは異なり、自治体 (gemeente) として規定されるものであった。共同体 (gemeenschap) としての規定はなく、法人格として、すなわち法共同体としての認定がなされるのである。原住民自治体条例は、オランダの村落 (dorp) についての自治体法をもとにしたものであった。自治体としてのデサ行政は、首長と、その指名による若干の補佐によって行われるのであるが、デサ首長の職務および職務上の権益、土地所有と賦役執行による所得については、慣習法上の規定が考慮されている。すなわち、共同体首長の権限を植民地地方行政のなかへ組み込む形で村落組織が再編されるのである。

3. デサ、ヌガラ、パサール

デサとカンボンについてさらに考察したい。まずデサを、さらに二つの概念との関係において考えてみたい。C. ギアツによれば^{文7)}、ジャワ社会には三つの「社会構造の中核」が存在する。すなわち、デサ、ヌガラ (negara : 国家政府官僚制)、パサール (pasar 市場) である。そして、彼はそれ以前にそれぞれと結びつく三つの文化類型を区別している。すなわち、アバンガン (abangan)、プリヤイ (priyai)、サントゥリ (santri) である。アバンガンとはジャワの農民、プリヤイは貴族・官僚、サントゥリは商人を意味する。C. ギアツは、それぞれがジャワのシンクレティック (重層的、混淆的) な宗教的伝統の三つの流れを代表するととらえる。すなわち、ジャワのシンクレティズムを構成する諸要素のうち、アニミズム的要素を強調するのがアバンガンであり、ヒンドゥー・仏教的要素を強調するのがプリヤイであり、そしてイスラム教的な要素を強調するのがサントゥリである。そして、それぞれの世界観、すなわち、宗教信仰、倫理選好、政治的イデオロギーを基準にして三つの文化の型を区別するのである。

アバンガン、プリヤイ、サントゥリという文化類型のための概念は、それぞれの中心的担い手である人間類型とあらかじめ結びつけられている。そして、その三つの類型は、また社会構造の三つの核に結びつけられる。すなわち、アバンガンがデサと、プリヤイがヌガラと、サントゥリがパサールに結びつけられるのである^{文8)}。ジャワ社会の構成についての以上のような三類型は、一つの図式的なモデルであって、必ずしもジャワ本来の概念に基づくものではない^{註8)}。しかし、ジャワ社会が、三つの宗教的伝統とその複雑な相互作用によって成り立ってきたことは大きな前提となる。C. ギアツは、モジョクト^{註9)}に即して、その複雑な相互作用を明らかにしようとしたのであった。以上の考察をもとにして、デサとカ

ンボンの関係についてのひとつの規定を手に入れることができる。

C. ギアツの『あるインドネシアの町の社会史』^{文9)}は、農村と都市の発展 (社会変動) プロセスを明らかにしているが、その概要は以下のようなものである。

モジョクトは、19世紀の中葉以降、他地域からの移住民によって形成された地域であり、20世紀初頭からは、オランダ砂糖業、エステート企業が進出してきた。そして、最も典型的にインヴォリューションの過程が進行した地域である^{註10)}。その過程において、モジョクトには、先の三つの宗教的伝統が持ち込まれる。

まず、中部ジャワのマタラム地域、北方のスラバヤへと流れるプランタス川流域、南西のクディリ平野の各地域からの農民によってアバンガンの要素が持ち込まれた。また、ほぼ同じ19世紀の中頃、ジャワ北岸部のクドゥス (Kedus) やデマ (Demak) からの移住者によってサントゥリの要素が持ち込まれる。さらに、都市部には、マタラム地域の貴族・官僚によってプリヤイの要素が持ち込まれる。そしてさらに、1910年頃、グレシク (Gresik) やラモンガン (Lamongan) の巡回商人や、モスクの最上級役人プンフル (penghulu) の一族によって、都市部にサントゥリの要素が持ち込まれる。

こうして、20世紀の初頭にモジョクトの町はほぼその体裁を整えるのだが、興味深いのは都市部の構成である。町はヌガラ、パサール、デサの三要素からなり、それぞれが隔絶した自足的な身分集団をなす複合的、異質的社会を形成するのである。このうち、デサの要素を都市に持ち込んで形成されたセクターをC. ギアツはカンボン・セクターという。都市化の過程で都市に再統合された居住地をデサと区別して、カンボンと呼ぶのである。インヴォリューション過程の進行の背後で、甘蔗エステート企業はプリヤイやサントゥリ商人が好まない新たな職業を生み出す。オランダ人のための使用人、プランテーション労働者、苦力、鉄道作業員、自転車修理業などである。後にいうインフォーマル・セクターのサービス業が中心である。そして、人々は農業とのつながりを次第に失い、都市のカンボンに再統合されていくのである。

C. ギアツの記述するモジョクトのカンボンは以下のような特質をもつものであった。

「カンボン・タイプの居住区はジャワのどこでも都市的生活の特性をもつが、同時に何らかの農村的パターンの再解釈を含んでいる。より密度高く、より異質性が高く、よりゆるやかに組織化された都市環境へ変化したものである。カンボンのパターンにおいては、全体のブロックは、一人ないし二人によって所有されている。通りに面する石造の家に住む人々が所有する場合が極めて一般的であるが、必ずしもそうでない場合もある。村で一般

的にみられる小さな竹の家がそのブロック内にバラバラに密集するのであるが、家々の間は隙間がなく、庭もない。それを取り囲むように石造の家が並ぶ。』²⁹⁾

C. ギアツは、カンボン・セクターの地図を示しているのであるが、幹線道路に沿ってブロックを囲むように並ぶのがレンガ造・石造の家であり、その内部に密集するのがバンブー・ハウスである。このパターンは現在の都市カンボンの形態からも裏づけることができる。例えば、スラバヤのカンボン・サワハン (kampung Sawahan)¹¹⁾ は、まさに上の記述のようであり、周辺は大邸宅や店舗などのビルが並び内部に民家が密集する(図-2)。その形成の初期は、おそらく C. ギアツの記述するような形態であったとみていいのである。

C. ギアツの場合、デサを明らかに自然村の意味で用いている。モジョクトの行政組織については、いくつかのドゥクハンからなる村落群がカルラハンとなる、とい

う。そして、ドゥクハンが自然村としてのデサに一致していると考えられている。デサが最小の村落単位であると考えられるのである。しかし、以上の考察から明かなように、この自然村としてのデサと、現在のデサは異なっている。C. ギアツのいうカルラハンのレベルが一般にデサと呼ばれているのである。C. ギアツは、また、スダに固有なものとしてカルラハンを考えてはいないのだが、上で見たように、カルラハンは歴史的にはスダ地域で使われていたものである。R. R. ジェイ¹⁰⁾は、公式用語としてのデサがジャワ語のカルラハンにあたるのだとする。混乱することになり、R. M. クンチャラニングラットは、カルラハン=デサという規定を行う。しかし、以上から、今日の行政単位としての農村部のデサードゥク、都市部のカルラハン、ジャワの自然村(村落共同体)としてのデサ、スダのカルラハン、下位単位をもつ村落連合としてのデサを区別することが必要となる。

そうしたうえで、カンボンに狭義に定義するとすれば、C. ギアツがデサとカンボンに区別した意味で、「都市村落」(urban village)と規定できるであろう。すなわち、デサ的要素を色濃く残しながら、都市において再統合されたものがカンボンである。デサ、そしてカンボンも、アバングンの伝統を色濃く残してきた。ジャワに固有な土着の宗教的伝統は、インド化によっても、イスラム化によっても根本的には変化していないとされる。共同体への忠誠、隣人との相互依存と協力、感情の抑制といった価値意識はアバングンに特有なものである。しかし、デサにしる、カンボンにしる、アバングンの伝統のみを保持する閉じた共同体としてとらえることはできない。サントウリの伝統も複雑に絡みあってきた。ジャワ社会、そして、カンボンの空間をとらえるうえでは、そうした複雑な相互作用の歴史的プロセスの理解が前提となる。

4. インドネシア都市の類型とその形成過程

以上をもとに、インドネシアの都市の形成過程をカンボンの形成過程として考察してみたい。インドネシアにおいて、都市はコタ(kota)と呼ばれる¹²⁾。サンスクリット語の koeta から転化したもので、元来は城壁に囲まれた場所を意味した。その後、城壁の有無にかかわらず、首都とか王宮のある都市をコタと呼ぶようになり、近代では地方行政都市に対しても使われるようになる。城郭都市としてのコタは、インドネシア都市のひとつの原型である。

C. ギアツによれば¹¹⁾、ジャワにおいて都市が成立する以前には、フィリピンのバランガイ(barangay)¹³⁾によく似た構造をもった水稲耕作村落(デサ)が存在していた。そのバランガイ型社会を統合した地域的支配者が出現し、その地域的支配者の中から他を制圧した王が誕

幹線道路に沿って大きな建物が殻のように並び中へ入ると密度が高くなり、住居の配列も規則性が崩れ、袋小路も多くなっていく。道路は、ジャラン(jalan 大通り)、ガン(gang 通り)、ブントゥ(bentu 袋小路)の三段階に分かれる。

1. モスク 2. 学校 3. 集会所 4. 見張所 5. 共同トイレ
6. 屋台 7. 電気設備 8. ゴミ収集所

図-2 カンボン・サワハン(スラバヤ)の状況

生することによってつくられたのが、城郭内に王宮、寺院、王族や行政幹部の館などをもつ城郭都市である。この城郭都市が、ヌガラ (Negara: ジャワの内陸国家)¹⁴⁾の首都である。

a. ヌガラ都市

インド化が始まるのは、西暦紀元の変り目の項である。都市の成立にとって鍵となったのは、ヒンドゥー教の神聖王権の観念である。当初、ヒンドゥー教の寺院は、山地にデサとは全く孤立してつくられ、建築様式もインドと全く同じ様式が採用されていた。そして、その寺院がやがて稲作可能な低地に降りて来ることによって都市が成立するのであるが、このヒンドゥー都市がどのようなものであったのかについてはいくつかの推測がある¹²⁾。市街の中心には、王侯の宮廷「クラトン」(kraton)や貴族の居住地「ダレム」(dalem)があり、それに隣接して「アルン・アルン」(alun-alun)と呼ばれる広場がある。このアルン・アルンを中心として、クラトンをはじめ、ダレムや「プンフル・アガマ」(penghulu agama)(宗教上の指導者)の住む「カウム」(kaum)など、重要な建物が周囲に配されるという構成がそうである。こうした構成は、現在でもその痕跡を認めることができる。スラバヤの「クラトン」、マラン (Malang) やバンドン (Bandung) の「アルン・アルン」など、そうした地名が残されているのである。

最初のヒンドゥー・ジャワ王国であるマタラム以降、ボロブドゥールを残したシャイレンドラなど中部ジャワ期の諸ヌガラ国家、そして、クディリ王国、シンガサリ王国、マジャパイト王国など東部ジャワ期のヌガラ国家、その中心としての城郭都市がヌガラ都市である。いずれも、基本的性格は同じであり、稲作を基盤とする自給自足的な内陸型の都市であった。都市は、後背地域のデサと貢納関係で結ばれ、宗教的、軍事的保護を与えるかわりに農業労働他の賦役を課すという形をとっていた。

b. パサール都市

東南アジアのイスラム化は、沿岸部の小さな港町の商人に受け入れられることにおいて徐々に行われる。インドネシアの場合、13世紀末に北スマトラ東岸の小さな港町がイスラム化されたのが最初である。ジャワ内陸部におけるヌガラの中心は、中部ジャワから東部ジャワに移っていくのであるが、それと平行して、パシシル地域 (Pasisir 北部ジャワ沿岸地域) がまずイスラム化されることになる。

内陸の城郭都市の支配者は、やがて沿岸部の小さな港町へ進出し、国際貿易に乗り出す。そこで成立するのが、城郭都市と異なった構成原理をもつ、市場 (パサール) を中心とするパサール都市である。その支配原理となったのが、イスラムである。イスラムが沿岸部の商人を中心として受け入れられたのは、それが平等主義的で倫理

的に普遍主義的な特質を持っており、交易を支える経済精神をもたらしたからとされる。

港町の商人のモビリティ (流動性) は高く、内陸におけるデサを支配するのとは全く異なった原理が必要とされる。イスラムの受容の過程は、もちろん単純ではないのであるが、新たな交易世界と土着の世界を包摂する原理としてそれは受け入れられ、沿岸部へ進出した支配者は順次イスラムへ改宗することになるのである。マジャパイト王国が衰退し始める16世紀前半には、スラバヤなど、パシシル地域の交易都市は次々と独立国家を形成し始める。このパサール都市がインドネシア都市のもう一つの原型である。

c. 植民都市

オランダのインドネシアへの進出は、1596年6月、コルネリス・ド・ハウトマンが艦隊を率いて西ジャワ、バンテン (Banten) に到達した時に始まる。そのインドネシア支配の母胎となったのが1602年に設立されたオランダ東インド会社、V.O.C. である¹⁵⁾。このV.O.C. による植民地化は、当初、出会い貿易の根拠地を捜して各地に商館を建て、やがて、バタヴィアを永久的根拠地とし、さらに内陸に侵攻するという過程をとった。こうして、インドネシアには、また一つそれまでとは異質の都市が植えつけられることになる。

交易期 (東インド会社期) を経て、強制栽培制度期 (1830~70年)、法人プランテーション期 (1870~1942年) へと至る本格的植民地支配によって、インドネシアの都市と農村の関係は決定的な影響をうける。その過程において形成された社会経済構造を骨格として、植民都市は二十世紀初頭以降急速に発展をとげる。植民地経済の「奇型」的構造の残存が二十世紀さらには第二次大戦後の課題都市化、プライメイト・シティ (首座都市、単一支配型都市) を生むことにつながっていくのである。

d. 都市カンボンの形成

ヒンドゥー化、イスラム化、植民地化という外的なモメントによって他成的に成立した都市は、それぞれ独自の原理をもっていたと言ってもいい。そして、農村もまたその相対的独立性を保ち続けた。また、都市においても、一般の住民が農村的生活様式を維持し続けてきたということも指摘される。ヴェルトハイムは、植民都市においても「都市のカンボンは農村的側面を温存していた。建築の様式や生活の慣習も支配的に農村的色彩を残していた。」という¹²⁾。しかし、一方、植民地化は、それまでとは全く異なった都市の成立を生む。オランダの植民地支配がジャワ内陸部へ深化するにつれて、各地に統治機関が設けられる。それを核として発達する都市が各地に形成されるのである。その都市は、城郭都市やパサール都市とは異なって、その二つの要素とさらにデサの要素を合わせ持つ。すなわち、従来のヌガラ・デサ関係にパ

サル要素が持ち込まれることによって、二次的、三次的都市が成立するのである。モジクト（パレ）はその典型であった。

一般的に言い直せば、まず、最初に、政府機関の設立とともにジャワ人官僚が進出してくる（ヌガラ要素の定着）。ついで表通りに華僑の商店が開かれると、ジャワ人巡回商人が姿を見せ始める。やがて定期市が開かれ、大工や仕立屋などの職人も定着し始めると、モスク周辺にジャワ商人の居住区域(kauman)が形成される(パザール要素の定着)。そして最後に、町の形成とともに裏通りにデサから移住してきた人々が住む区域、カンポンが形成されるのである（デサの要素の定着）。

5. スラバヤにおけるカンポンの形成

以上の考察を前提として、具体的な都市についてみたい。取り上げるのはスラバヤである。

スラバヤの名が文献に初めて現れるのは14世紀のことであるが、しかし、それ以前にももちろん都市の発展の基礎はある。11世紀の碑文には、その前身としての港町が記されている^{注16)}、^{文13)}。古くからの交易都市として東西貿易に組み込まれていたとみてよいだろう。ヒンドゥー・ジャワ王国の東部ジャワ期の中心都市、クディリ、シンガサリ、マジャパイトの各王朝の首都とスラバヤはブランタス川を通じて結ばれている。ヌガラ都市の重要な港町として、都市の基礎がつくられ、イスラム化、植民地化を経ながら、パシシル地域の他の貿易都市と同じようなパターンで発展してきたと考えられる。

イスラム化は、スラバヤ周辺ではグレシクが最初である。そしてまもなく、スラバヤもマタラム王国の支配下に入っている。スラバヤの発展は、15世紀中葉にイスラム教師が到来し、現在、市の中心モスクのあるアンペル(Ampel)の地に住みついて以来のことである^{注17)}とされる。16世紀に入ってマジャパイト王国が没落すると、スラバヤは、デマの支配下に入るが、相対的に独立した都市国家として繁栄を誇り、その影響力を東部ジャワ、中部ジャワのみならず、東インドネシア一帯に及ぼしていた^{文14)}。17世紀初頭には、市域約800ヘクタール、約5万人が居住していた。その時期、スラバヤを訪れたオランダ商人は、都市は整備され、重要な交易拠点としてうまく組織されていたと書き記している。

1743年、マタラム王国の一部であったスラバヤは、V.O.C.に譲渡され、それ以降、第二次世界大戦に至るまで植民地支配のもとに置かれる。当初、植民地経営の失敗から衰退を招くのであるが、プランテーション・ブームに乗り、19世紀初頭には再びV.O.C.の主要な商工業都市として発展を遂げる。独立後、中央集権化によって、ジャカルタへ人口が集中することになるのであるが、戦前期には、スラバヤはインドネシア第一の都市

であった。オランダ領東インドでも代表的な植民都市がスラバヤである。

19世紀初頭の地図(1825年 図—3)を見ると、スラバヤの周辺はほとんど湿地帯であり森である。スラバヤの町は島のように浮いているように見える。ジャワ人のカンポンもまばらである。ダーンデルス(Daendels)^{注18)}の時代(1808～11年)に、本格的な都市建設が始まる。道路が建設され、中心部の再開発が行われる。ジャワ戦争(1825～30年)を経て、防衛のために要塞や堀が築かれるのである。カリ・マス(Kali Mas)要塞である。

一日1500人もジャワ人が何の補償もなく動員された。それも、はるか遠方のクディリ、レンバン(Rembang)、バニユワンギ(Banyuwangi)などからもかき集められている。こうした形の植民によって多くのカンポンがつくられるのである。また、要塞と堀の建設で192のカンポンのうち、54のカンポンが潰され、多くのジャワ人が市外へ追放された。要塞で囲まれた市域は、

Faber, G.H. von., Out Soerabaia, Surabaya, De Gemeente Soerabaya, 1930

中心部に居住地が建設されているほかは点々とジャワ人のカンポンが点在するだけである。

図—3 スラバヤの地図 1825 年

Faber, G.H. von., Out Soerabaia, Surabaya, De Gemeente Soerabaya, 1930

カリマス要塞の内部に北からアラブ・カンボン、マレー・カンボン、チャイニーズ・カンボンの名が見える。カリマス城の東には筆者が調査したカンボン・サワプローの名が既に確認できる。

図-4 スラバヤの中心部 1866 年

東西 1 850 m, 南北 2 700 m ほどである。周辺部を加えると 900 ha, 約 7 万 8 千のジャワ人が居住していたとされるから、2 世紀を経てそう人口が増えたわけではない。急成長していくのは、1830 年からの強制栽培期以降である。

19 世紀中葉の地図 (1866 年 図-4) を見ると、中心部の様子がわかる。その西半分, カリ・マス川の西がヨーロッパ人の居住区である。オランダ人は、ニアガ (Niaga) 通りの北を占めていた。そして東半分が、四つに分けられている。北からジャワ人のカンボン, アラブ・カンボン, マレー・カンボン, チャイニーズ・カンボンが並ぶのである。チャイニーズが居住していたのは、現在のクンバン・ジュブン (kembang Jepun)^[注19] の周辺である。アラブ人は、ンガムプランガン (Ngemplungun) 通りの周辺に集中していた。現在でも、アンベル周辺にはアラブ人が多く住んでいる。

スラバヤは北から南へ発展していく。20 世紀初頭に

は、市域は 4 275 ha に拡大し、人口約 15 万人となる。そして、1920 年には約 20 万人、1930 年には約 33 万人にも膨らんでいく。ブランタス川流域の灌溉施設の拡張、甘藷糖業の増産などとともに、タンジュン・ペラ (Tanjung Perak) にスラバヤ港が開設されたのが大きい。また、南北軸に沿って鉄道が敷設されたことも大きい。南への市域の拡大がさらに加速されるのである。スラバヤの発展は、戦後、特に 60 年代から 70 年代にかけてすさまじいものがある。1950 年に 71.5 万人、60 年に 99 万人、70 年に 155 万人、80 年に 203 万人、まさに倍々で増えてきた。60 年以降、都市の発展に新たな傾向が現れる。南北軸に沿った発展に加えて、東西の幹線道路に沿った拡大が見られ始めるのである。ビルト・アップ・エリア (既成市街地) は、8 562 ha (1969 年) から 10 204 ha (1981 年) まで増える。そのうち 65.5 % の 1 077 ha は住宅地の増加である。そして、1985 年現在、233 万人 (スラバヤ市の統計で登録人口は、216 万人 (1987 年))、未登録人口および、マドゥラ島からの季節的な流入者を入れれば、300

万人をゆうに超える大都市となった。そして、その大半がいわゆるカンボンに居住しているのである。

6. まとめ

カンボンはインドネシアに固有な居住地である。カンボンという言葉は、もともとスダグ地域の村落カルラハンの下位単位として用いられたものであるが、その後一般的に集落、部落、ムラをさす言葉となった。農村でも都市でも一般的に居住地を指して用いられるところにその特質がある。本稿では、まず、その用語についてその起源を明らかにし、既往の諸論稿を検討した上で、カンボンという概念についての歴史的規定を行った。

具体的には、ジャワの伝統的な村落としてのデサとの比較においてカンボンを定義づけるとともにその特質を明らかにした。カンボンは、ジャワの伝統的な村落であるデサの特性を様々な形で引き継いでいる。しかし、デサの伝統がそのままカンボンに残存するのではなく、デサ

的な要素が都市において再統合されることによって成立するのがカンボンである。

続いて、インドネシア都市の類型とその形成過程を論じる中でカンボンの形成過程をとらえる視点を明らかにした。また、具体的な都市スラバヤに即してその形成過程を叙述した。インド化、イスラム化、植民地化の重層的な歴史がカンボンの形成にかかわっている。

謝 辞

本研究の実施に当たっては、住宅総合研究財団およびトヨタ財団の助成を受けた。感謝の意を記したい。また、本研究は、筆者もそのメンバーのひとりであった東洋大学の東南アジア研究グループにおける共同作業および議論に多くを負っている。特に、前田尚美、太田邦夫、上杉 啓、内田雄造の各先生の御指導に感謝したい。

注

- 1) 欧文では Kampung と表記されることが多い。
- 2) ゴトン・ロヨンと呼ばれる相互扶助の精神と慣行はインドネシアの国是とされる。もともとはデサの慣行であり、ムシャワラ (musyawarah 相互討論) からムパカト (mupakat 相互同意) を経て、最後に行う相互協力を意味した。地域によって異なるが、次のようなものがある。①村人の死、不幸に際して行われるもの (tutulung) ②灌漑水路の改造、モスクやランガーの建設修理 (gugur-gunung) ③婚礼や割礼の際の祝宴 (スラマタン: slametan) において行われるもの (guguban) ④先祖の墓の掃除や世話 (rerukunan alur walis) ⑤屋根の修理や井戸堀り (sambatan: 住宅の建設もサンバタンで行われる) ⑥農作業 (grodjogan) ⑦溝掃除や橋などの修復 (kerigan)。こうしたゴトン・ロヨンの活動は、⑥を除けば、都市のカンボンで今もみることができる。そうした意味で、デサの伝統はカンボンにおいても保持されているとされる。
- 3) ルクンを最高の価値とするジャワのデサの伝統は、ジャワの歴史の大きな変動の過程においても生き続けてきた。ルクン・ワルガ (RW: Rukun Warga: 町内会)、ルクン・タタンガ (RT: Rukun Tetangga: 隣組) というようにコミュニティの単位としてその語は使われている。
- 4) オランダの植民地政府は伝統的な村落について極めて強い関心を示した。慣習法や農業、家族構造、宗教の習慣については多くの研究文献がある。そうした伝統の村落や慣習法についての研究に比して、都市についての関心は極めて薄く、文献もほとんどない。それでも 20 世紀の初頭になると、都市がテーマとなってくる。都市化の急速な進展とともに都市問題が起り無視し得なくなるのである。

1909 年、スマランにおいてカンボンの生活実態調査が行われる。中心となったのが D. J. A. ウェスターファルト D. J. A. Westervald であった。彼は、さらに 1914 年 5 月により詳細な調査報告書を議会に提出している。続いて、精力的に調査活動を開始し、多くの書を自費出版したのが H. F. ティレマ H. F. Tillema である。薬剤師であった彼は、衛生問題に大きな関心を抱くのである。彼はいち早く、1913 年に住宅問題についての本を書いている。続いて、5 巻に及ぶ大著『クロモブランダ Kromo-

blanda』を 1916 年から 22 年にかけて出版している。インドネシア都市研究についての論稿は、カンボン・インブループメント・プログラムを歴史的に位置づける論稿として別稿としたい。

- 5) ファン・フォレンホーフェン Cornelis van Vollenhoven (1874-1933)。オランダの法学者でインドネシア慣習法 (Adat) 研究の創始者。1901 年、ライデン大学教授。1918 年、大著『オランダ領東インドの慣習法』の第一巻を刊行。1910 年以降、『慣習法集成』45 巻の刊行を指揮した。
- 6) 村落組織にとって大きいのは、1870 年の農地法 (Agrarische Wet) 以降の諸立法である。村落の分割と統合のための立法は、まず 1879 年に行われ、81 年、95 年と改正されている。1895 年の法令が「王侯領を除くジャワおよびマドゥラにおけるデサの分割と統合についての新規則」である。そして、続いて制定されたのが、1906 年の原住民自治体条令である。
- 7) インドネシアの農村社会、デサに関する歴史的実証的研究は、ほとんど唯一『ジャワ・マドゥラにおける現地人土地権調査最終提要』全 3 巻 (Eindresumé van het bij Guevernments Besluit dd. 10 Juni 1867 No. 2 bevolen Onderzoek naar de rechten van den Inlander op den Grond op Java en Madoera, zamengesteld door den chef der Agdeeling Statistiek ter Algemeene Secretarie.) をもとにしている。

1830 年以降、ジャワ (マドゥラ) は、中部の王侯領を除いて、すべてオランダの直轄領となっていたのであるが、植民地政庁は、この直轄領内の 808 村を選んで 1868～69 年にはじめて本格的な土地調査を実施した。その結果まとめられたのが『最終提要』(1876～89 年) である。土地調査の大きな目的は、私企業プランターの進出を可能にする方向を含めて、土地所有権および利用権を確保することであった。ジャワにおける村落の歴史は極めて古い。碑文によって少なくとも 9 世紀にさかのぼることができるのであるが、もちろん、それ以前からの歴史をもっている。しかし、その形態を明らかにする資料はない。『最終提要』においては、13 世紀までさかのぼれる村落があるが、具体的に検討できるのは 19 世紀中葉以降の村落である。それをもとにした邦文論考は以下のようである。

加納啓良: a. 「デサ共同体に関する一考察—『現地人土地権調査最終提要』を素材に—」, 『アジア研究』, 第 22 巻第 4 号, 1976 年 b. 「19 世紀ジャワの土地制度—『現地人土地権調査最終提要』に見る—」, 『アジア経済研究所』, 1974 年 c. 「19 世紀ジャワの土地制度と村落 (デサ) 共同体」, 齊藤 仁編, 『アジア土地政策論序説』, アジア経済研究所, 1976 年

内藤能房: a. 「19 世紀ジャワの『土地占有形態』再考—ジャワ村落の歴史的な性格に関する一考察—」, 『アジア研究』, 第 24 巻第 1 号, 1977 年 b. 「19 世紀中葉のジャワ村落における賦役遂行—ジャワ村落の歴史的な性格に関する一考察—」, 『一橋論叢』, 第 78 巻第 3 号, 1978 年 c. 「19 世紀中葉のジャワ村落と村落運営について—植民地行政との関連において—」 d. 「中部ジャワにおける土地保有と村落の土地処分権について」, 『一橋論叢』, 第 72 巻第 5 号, 1974 年 e. 「『ジャワ・マドゥラにおける

原住民土地権調査最終提要】全3巻について」,『一橋論叢』,第76巻第4号,1976年

森 弘之:「ジャワの「共同的占有」と強制栽培制度」,『社会経済史学』,Vol.41, No.4, 1976年

植村泰夫:「糖業プランテーションとジャワ農村社会—19世紀末—20世紀初めのスラバヤを例にして—」,『史林』,第61巻第3号,1978年

中村光男:「ジョクジャカルタ市コタグデにおける社会人類学調査の予備報告」,『東南アジア研究』,第10巻第3号,1978年

- 8) アバンガン, プリヤイ, サントゥリという概念は, ジャワの社会文化をとらえる基本的な概念として広く知られるようになったのであるが, いくつかの問題点も指摘されてきた。主要な問題点は以下の二点である。一つは, アバンガン, サントゥリという概念とプリヤイという概念がジャワにおいて全く別の次元の概念であるという点, もう一つは, 文化類型あるいは宗教意識と特定の社会階層との間に特別な結びつきは存在しないという点である。
プリヤイというのは社会階層の上下にかかわる概念であり, 支配エリート層を指す。プリヤイと対をなすのは, ウォン・チリク (wong cilik 常民), ウォン・ウィダー (wong widah 平民), ウォン・タニ (wong tani: 農民) という概念である。それに対してアバンガンとサントゥリの二つの概念は, 宗教意識にかかわる概念である。アバンガンは名目的にはイスラム教徒であるがあまり熱心ではない人に対して用いられる。アバンガンはウォン・アバンガン (wong abangan: 赤衣の人) に由来する言葉であるが, その対となるのはウォン・プティハン (wong putihan: 白衣の人) である。イスラム教に熱心で敬虔な人々が白衣を着ることからそう呼ばれてきた。以上二つの分類軸からすれば, 当然四類型となる。C. ギアツの場合, まず, 敬虔なイスラム教徒とそれ以外を区別し, 続いて, 後者について二類型を考えるのであるが, ヒンドゥー教とジャワ主義を区別して, それにプリヤイ, アバンガンという概念を当てはめるのは適当ではない。第二の批判点も, 上とかかわる。例えば, プリヤイ層にも, イスラム教に熱心なサントゥリ・プリヤイとそうでないアバンガン・プリヤイが存在しており, 特定の社会階層と類型の間に必ずしも特定の関係はないのである。
- 9) C. ギアツがジャワ研究の出発としたモジョクト (Mojokuto) は, 東ジャワのクディリ (Kediri) 県 (kabupaten) の区 (クチャマタン kecamatan) ・パレ (Pare) の仮称である。モジョクトは, モジョクルト (Modjokerto) からとられたものである。パレは, スラバヤの西南約50キロのところにある。その地域一体は, クディリ王朝を初めとする東部ジャワ期のヒンドゥー王国の栄えたところである。そして, そのヌガラを中心地域は, ブランタス (brantas) 川を通じて河口のスラバヤへつながっている。パサル都市としてのスラバヤと内陸のヌガラ都市との間に形成された町がパレである。
- 10) インヴォリューションとは, もともと人類学者 A. ゴールデンワイザーが, 未開社会でよくみられるある特定の文化型, すなわち「ある確たる型を形成したにもかかわらず, 安定もしなければ新しい型へ転換することもなく, むしろその内部でより複雑化することによって展開するような文化型」を説明するのに用いた概念である。経済

的には, 「一定の耕地面積に対する労働投入量を増加させることだけによって, 農業の産出額を増加させていくような, いわば前進なき技術変化のパターン」, 「労働集約化のみによって生産を増加させていく, 農業の内向的発展」を説明する概念がインヴォリューションである。

- 11) カンボン・サワハンは筆者が調査を行ったカンボンであり, スラバヤの都心部に立地するカンボンである。
- 12) 現在では, 一般に, 日本語の「町」というニュアンスで用いられる。「市」に対してはコタマジャ kotamadja が用いられ, 大都市と一般の都市コタが区別される。
- 13) イスラム化, スペイン化を被る以前にフィリピン群島に存在した社会組織。通常30~100戸程度の家族を単位として構成。バラングイの基本的構成員は, 首長の親族か姻族であり, 親族集団とみなせる。行政村としてバリオ (barrio) が用いられてきたが, 1972年以降, バラングイが再び用いられ始めた。
- 14) ヌガラを内陸国家としてとらえる C. ギアツに対してヌガラをムアン (タイ語で, 城壁をもった一定規模の集落を意味する) との対比において, 交易都市として位置づけるのが石井米雄・桜井由躬雄の『東南アジア世界の形成』(講談社1985年)である。それによると, ヌガラとは, 川の河口や分岐点に位置し, 内陸を海の世界へ結ぶ機能をもった国家である。小規模で, 領域というものはなく, 川筋をめぐる縄張りのみがある。中部ジャワの古マタラムは, ムアン国家の典型であるとする。しかし, ここでは, C. ギアツに従い, 内陸国家の城郭都市として, ヌガラを規定しておきたい。
- 15) オランダ東インド会社 Vereenigde Oost Indische Compagnie 1602-1799: 世界最初の株式会社。オランダ政府より与えられた特許状による権限は, 東インドのみならず, 喜望峯の東からマゼラン海峡の西までの広大な領域に対して与えられた。1609年より総督の制度を採用。1670年代から, マタラム王国の内紛に乗じて, ジャワ内陸部へ少しずつ領土を拡大していった。1799年解散。
- 16) 碑文は, クラゲン (Kelagen) で発見された1037年のもので, フジュン・ガル (Hujung Galuh) という名の町が記されている。また, 14世紀の年代記は, Nagarakertagama という。
- 17) ジャワでのイスラムの布教に力を尽くした九聖人 (ワリ・ソンゴ) のうちの一人, ラデン・ラフマツ (Raden Rahmat) がスラバヤを訪れ, その発展が始まる。彼は1483年にアンベルの地で死に, 墓とモスクがつくられた。カンボン・アンベルの墓地は, 今日でも聖地として尊崇されている。
- 18) ダーデルス (1762-1818)。1809年にオランダ領東インド総督に任命され, 翌年着任。ジャワ縦貫道路建設を実施。1811年ナポレオン一世によって罷免。
- 19) 「日本の花」という意味である。日本とスラバヤの関係を通りの名が示している。

参考文献

- 1) 拙稿: インドネシアのカンボンの実態とその変容過程の考察—第三世界の居住環境とその整備手法に関する研究その2, 日本都市計画学会学術研究論文集20, pp. 307~312, 1985年
- 2) R. M. Koentjaraningrat: "Some Social Anthropological Observations on Gotong Royong Practices in Two

- Indonesian Villages of Central Java", Cornell University, 1961
- 3) 拙稿：KIP の評価とインパクトスタディー—東南アジアの住居と居住環境に関する研究 22, 日本建築学会学術講演梗概集, 1984 年/拙稿：カンボンの変容過程と KIP の評価—東南アジアの都市と住居に関する研究 26, 日本建築学会関東支部報告集, 1985 年
 - 4) R.M. クンチャラニングラット編：加藤 剛, 土屋健治, 白石 隆訳, 『インドネシアの諸民族と文化』, めこん, 1980 年
 - 5) 岸 幸一：ジャワの村落組織についての覚書—デッサとカルラハンについて, 『東洋文化』, No. 43, 1967 年
 - 6) 倉田 勇：インドネシア慣習法学の村落研究覚書—G. van Vollenhoren の『慣習法の発見』などを中心として 滝川 勉編, 『東南アジア農業問題研究の現状』所収, アジア経済研究所, 1970 年
 - 7) C. Geertz : "The Religion of Java", The Free Press of Glencoe, 1960
 - 8) 間亭谷栄：現代インドネシア研究, 勁草書房, 1983 年
 - 9) C. Geertz : "The Social History of an Indonesian Town", M.I.T. Press, 1965
 - 10) Robert R. Jay : 'Religion and Politics in Rural Central Java', Cultural Report Series No.12 Southeast Asia Studies, Yale University, 1963
 - 11) C. Geertz : "The Development of the Javanese Economy : A Socio-Cultural Approach", Center for International Studies, M.I.T., 1956
 - 12) Keyfitz Nathan : 'The Ecology of Indonesian Cities', 1961 : in "Changing South-East Asian Cities", Singapore, Oxford University Press, /Wertheim, W.F. : Indonesian in Transition Bandung', Sumur Bandung, 1956/Wertheim, W.F. : "Effects of Western Civilization on Indonesian society", New York, 1950
 - 13) Oki Akira : The Transformation of the Southeast Asian City : The Evolution of Surabays as a Colonial City, East Asian Cultural Studies 27, nos.1-4 (march 1988) /William H. Frederick : Hidden Change in Late Colonial Urban Society in Indonesia, Journal of Southeast Asian Studies 24, No.2
 - 14) J. Silas : 'Operation of Urban Land Market in Surabaya', AIT, Bangkok, 1982/J. Silas, 'Spatial Structure, Housing Delivery, Land Tenure and Urban Poor in Surabaya', 1983
- (1991 年 3 月 30 日原稿受理, 1991 年 12 月 16 日採用決定)